

源氏供養

古名

紫式部

河上神主作

世阿弥とも

前

ワキ 安居院法印

ワキヅレ 従僧

シテ 里女

後

ワキ 前に同じ

ワキヅレ 前に同じ

シテ 紫式部

地は 近江

季は 春

「衣も同じ苔の道。く。石山寺に参らん。

「是は安居院の法印にて候。我石山の観世音を信じ。常に歩みを運び候。今日も又参らばやと思ひ候。

「時も名も。花の都を立ち出で。く。嵐につる、夕波の。白河表過ぎ行けば。音羽の滝をよそに見て。関の此方の朝霞。されども残る有明の。影もあなたに鳩の海。実に面白き気色かな。く。

「さゝ波や。志賀唐崎の一つ松。塩焼かねども浦の波。

立つこそ水の煙なれ。く。

「なふく安居院の法印に申すべき事の候。

「法印とは此方の事にて候ふか何事にて候ふぞ。

「我石山に籠り。源氏六十帖を書き記し。亡き跡までの筆のすさび。名の形見とはなりたれども。彼源氏に終に供養をせざりし科により。浮ぶ事なく候へば。然るべくは石山にて。源氏の供養をのべ。我跡弔ひてたび給へと。此事申さんとて。是まで

参りて候。

ワキ「是は思ひもよらぬ事を承り候ふ物かな。さりながら易き間の事供養をばのべ候ふべし。さて誰と志して廻向申し候ふべき。」

シテ「先づ石山に参りつゝ。源氏の供養をのべ給はゞ。其時我も顕はれて。共に源氏を弔ふべし。」

ワキ「嬉しやそれこそ奇特なれ。いで源氏を書きしは。」

シテ「恥かしや此身は浮世の土となれども。」

ワキ「名をば埋まぬ苔の下。」

シテ「石山寺に立つ雲の。」

ワキ「紫式部にてましますな。」

シテ「恥かしや。色に出づるか紫の。」

地「色に出づるか紫の。雲も其方か夕日影。さしてそれとも名乗り得ず。かき消すやうに失せにけり。」

く。(中入)

ワキ「さて石山に参りつゝ。念願の勤め事終り。夜も更

方の鐘の声。心も澄める折節に。

ツレ「有りつる源氏の物語。誠しからぬ事なれども。

ワキ「供養をのべて紫式部の。

ツレ「菩提を深く。

ワキ「弔ふべきなり。

歌「とは思へどもあだし世の。く。夢にうつろふ紫

の。色ある花も一時の。あだにも消えし古への。

光る源氏の物語。聞くにつけても其まこと。頼み

少なき心かな。く。

後ジテ一声

「松風も。散れば形見となる物を。思ひし山の下紅
葉。

地「名も紫の色に出でゝ。

シテ「見えん姿は恥かしや。

ワキ「かくて夜も深更になり。鳥の声をさまり。心すご
き折節。灯の影を見れば。さも美しき女性。紫
の薄衣のそばを取り。影の如くに見え給ふは。夢

か現か覚束な。

シテ「うつろひやすき花色の。襲の衣の下こがれ。紫の色こそ見えね枯野の萩。もとのあらまし末通らば。名乗らずと知ろし召されずや。

ワキ「紫の色には出でずとあらましの。言葉の末とは心得ぬ。紫式部にてましますか。

シテ「恥かしながら我姿。

ワキ「其面影は昨日見し。

シテ「姿に今も変はらねば。

ワキ「互に心を。

シテ「起きもせず。

地「寐もせで明かす此夜半の。月も心せよ。石山寺の鐘の声。夢をも誘ふ風の前。消えしはそれか灯の。光る源氏の跡とはん。く。

シテ詞「あら有難の御事や。何をか布施に参らせ候ふべき。

ワキ詞「いや布施などゝは思ひもよらず候。とても此世は

夢の内。昔に返す舞の袖。唯今舞うて見せ給へ。

シテ
「恥かしながらさりとては。仰せをばいかで背くべき。いでくさらば舞はんとて。

ワキ
「本より其名も紫の。

シテ
「色めづらしき薄衣の。

ワキ
「日も紅の扇を持ち。

シテ
「恥かしながら弱々と。

ワキ
「あはれ胡蝶の。

シテ
「一遊び。

地
「夢の内なる舞の袖。く。現に返す由もがな。

シテ
「花染衣の色重。

地
「紫匂ふ袂かな。

シテクリ
「夫れ無常といつぱ。目の前なれども形もなし。

地
「一生夢の如し。誰有つて百年を送る。槿花一日唯同じ。

シテサシ
「こゝに数ならぬ紫式部。頼みを懸けて石山寺。悲

願を頼み籠り居て。此物語を筆に任す。

地「されども終に供養をせざりし科により。妄執の雲も晴れ難し。」

シテ「今逢ひ難き縁に向つて。」

地「心中の所願を起し。一つの巻物に写し。無明の眠りを覚ます。南無や光る源氏の幽霊成等正覚。」

クセ「抑桐壺の。夕べの煙すみやかに。法性の空に至り。箒木の夜の言の葉は。終に覚樹の花散りぬ。空蟬

の。空しき此世を厭ひては。夕顔の露の命を觀じ。

若紫の雲の迎へ。末摘花の台に座せば。紅葉の賀の。秋の落葉もよしや唯。たまく仏意に逢ひながら。榊葉の。さして往生を願ふべし。

シテ「花散る里に住むとても。」

地「哀別離苦の理。まぬかれ難き道とかや。唯すべからくは。生死流浪の須磨の浦を出でゝ。四智円明の。明石の浦に滯標。いつまでも有りなん。唯蓬

生の宿ながら。菩提の道を願ふべし。松風の吹く
とても。業障の薄雲は。晴るゝ事更になし。秋
の風消えずして。紫磨忍辱の藤袴。上品蓮台に。
心を懸けて誠ある。七宝莊嚴の。真木柱の本に行
かん。梅が枝の。匂ひに移る我心。藤の裏葉に置
く露の。其玉葛かけしばし。朝顔の光り頼まれず。
シテ「朝には梅檀の。陰に宿木名も高き。

地「官位を。東屋の内に籠めて。楽しみ栄えを。浮舟

に喩ふべしとかや。是もかげろふの身なるべし。
夢の浮橋を打ち渡り。身の来迎を願ふべし。南無
や西方弥陀如来。狂言綺語を振り捨てゝ。紫式部
が後の世を。助け給へと諸共に。鐘打ち鳴らして。
廻向も既に終りぬ。

ロンギ地「実に面白や舞人の。名残今はと鳴く鳥の。夢をも
返す袂かな。

シテ「光る源氏の御跡を。弔ふ法の力にて。我も生れん

蓮の。花の縁は頼もしや。

地 「実にや朝は秋の光。

シテ 「夕べには影もなし。

地 「朝顔の露稻妻の影。何れかあだならぬ。定めなの
浮世や。

地 「よくく物を案ずるに。く。紫式部と申すは。

彼石山の観世音。仮に此世に顕はれて。かゝる源
氏の物語。是も思へば夢の世と。人に知らせん御

方便。実に有難き誓ひかな。思へば夢の浮橋も。
夢の間の言葉なり。く。